

# ヘンリー・ジェイムズ 『信頼』

水野尚之

## 第九章

バーナードはこの問題についてかなり理論的に話した。というのも彼自身としては、魅力を感じはじめたばかりの状態でも、深く魅了されている状態でもなかつたからである。しかし彼はアンジエラ・ヴィヴィアンとは気楽につき合つており、友人が言つた不可思議な不安など感じなかつた。不可思議な要素はむしろその若い女性の母親にあつた。なぜかは分からぬが、母親は彼と会うのを避けているという印象を与えたのだ。母親のそのような態度を彼は残念に思つた。彼がかつてとても好きだつた社会の奇妙な見本のような、この引っ込み思案で誠実で小柄な女性に、彼は好感を抱いていたからだ。ヴィヴィアン夫人が古いニューアイングランドの家系であることを彼は知つたが、彼女がボストンの気風によつて生氣に満ちていると見抜くのに、この情報は必要ではなかつた。「彼女はボストン気質だ」と彼は、慣れ親しむようになつて、連想を次々とかきたてる言い回しを使いながら言つた。しかしすぐに彼は、ヴィヴィアン夫人がピューリタンの娘であつたとしても、彼女の気質の中のピューリタンの特徴は別の要素と混じりあつてゐる、と付け加えた。「あれは洗練されたボストン気質だ」と彼は言つ

た。「少々ゆがんでいて、たぶん堕落さえしている。活力が劣る気候が注入されたその土地の東風だ」彼にはヴィヴィアン夫人は世俗化したピューリタン、ゆるんだボストン人に見えた。そして実に奇妙なことに、この印象は彼に、彼女をもっと知りたいという気にさせた。彼は、慇懃に彼女のところへ行つて次のように言いたいと思った。「大変名誉ある同国人のヴィヴィアンさん、あなたのお気に触るようなどんなことを僕がしたのでしょうか？」僕のことをよく思つていらっしゃらないようですが、僕はどうしてもその理由が知りたいのです。あなたのお気に入るよう努力できたら、僕はとても嬉しいのですが。でも無理ですね。あなたは僕を冷たくあしらわれる。あなたに話しかけても、そっぽを向かれる。僕がお嬢さんに話しかける時だけ、あなたは僕を見てくださる。そういう時にあなたが僕を大変きつく見てくださるのは事実であり、もし僕がそれほど思い違いをしていなければ、あなたは目にしておられることに満足しておられない。僕があなたの美しいアンジェラさんにかける言葉を、あなたは数えていらっしゃる。僕たちの無害なちょっととした会話の時間を計つていらっしゃる。実際、可能な時はいつでも、あなたは僕たちの会話を遮られる。彼女を呼んで引き離されるか、彼女に話しかけられる、または会話に割つてこられる。僕たちを引き離す策をいつも練つておられる。どうして僕を放つておけないのでしょうか？僕はもつとも無害な男だと請合います。あなたの美しいアンジェラさんは、僕の話などで傷つくなんてありえません。彼女の心の平安について、僕は何のもくろみもありません。あなたのお気に触るような、どんなことを僕がしたのでしょうか？」

こうした言葉をバーナードは言っていた。そしてある日の午後その機会が訪れた時、その言葉は彼の唇まで上り、あやうくそこから出かかった。しかし実際は、最後の瞬間に彼の雄弁は別の方へ向かった。ハウスでは午後にオーケストラの演奏があるのが慣わしであり、音楽がしばしば素晴らしいために、三時になる

とたくさんの人が木々の下に集まつた。いつもならばこの時間は、我々が特に興味を持っている小さなグループが集まる時間ではなかつた。特にヴィヴィアン嬢は、遠出か何かが前日に決められているのでなければ、夕方までにクワハウスの付近に姿を現すことは、普通はなかつた。ある午後三時に、バーナードはバー・デンのこの小さな社交の中心に足を向けた。そしてテラスを通つていると、ブランシユ・エヴァーズが、ピンクのパラソルを差しラブロック大尉に伴われてそこを散歩してゐるのに出会つた。この若い女性はいつも実際に社交好きだった。彼女が立ち止まって我々の主人公に挨拶したのは、彼女の持ち前の愛想のよさにまつたく適つていた。

「ロングヴィルさんはとても軽薄におなりです」と彼女は言つた。「いつでもクワハウスにおいでになるんですもの」

「あなたに会えるかもしぬないと思つてここへ来ることは、決して軽薄ではありません」と若者は答えた。「たいへん重大なことです」

「エヴァーズさんに会うより見失う方が、もっと重大でしょう」とラブロック大尉は、雄々しくおどけて言つた。  
「私を見失われたらいいのに!」と若い娘は叫んだ。「私は見失つてほしいと思つています。そうすれば、あらゆる種類の冒險ができるでしょう」

「きっとそう『でしょう』とも!」とラブロック大尉は楽しそうに言つた。

「まあ、自分で道は見つけられます。自分のことは自分でやれますわ!」とブランシユは続けた。

「ヴィヴィアン夫人はそうは思つておられません」と夫人を見つけたバーナードは言つた。夫人は本を手にして木陰に腰をかけ、その本ごしに、預かつておられる可愛い娘を見ていた。ブランシユは夫人の方を向いて、ちょっと頷いてから微笑んだ。それから若者に喋りかけた。「彼女は怖ろしく用心深いんです。あれほど用心深い人は見

たことがありません。でもおそらく彼女が正しいのでしょうか。彼女は私の母に、ひどくうるさくします、と約束したのです。でも私が何をやると彼女が考えているのか、私にはわかりません」

「それは僕には嬉しくはありません」とラブロック大尉は言った。「ヴィヴィアン夫人は僕のことを認めてくださいません。僕がジャマイカにいたらいのに、と思っておられます。僕にどんなことができると思っておられるのでしょう?」

「そして今は僕のこともだね?」とバーナードはたずねた。「彼女は僕のことを少しも好きではない。でも僕としては、彼女がすばらしいと思っている」

「僕は彼女にとても丁寧にしているとは言えません」と大尉は言った。「彼女は猫みたいに狡猾だと思います」

ブランシュ・エヴァーズは恐怖の小さな叫び声を上げた。「もうやめてください! 私にとても優しくしてくださった人のことを、あなたがそんな風に言うなんて許しません」

「彼女はあなたにそれほど優しくはありません。僕が会えないところにあなたを閉じ込めたい、と思っていらっしゃいます」

「それは気にならないと思いますわ!」と若い娘は、少し笑いながら頭をつんとそらして言った。「ヴィヴィアン夫人の性格はまったく完璧です。だから私の母が私に夫人と同行するように望んだのです。そしてもし夫人が私の母に注意深くしますと約束したのなら、約束を守ることは正しいことではありませんか? 夫人は私の母よりもずっとずっと注意深いのです。それこそ母が望んだことですわ。母は面白いことはしようとしません。それでいつも私を叱っていました。ヴィヴィアン夫人は決して私を叱りません。彼女はただ私を見張っているのです。でも私は気になりません」

「僕としては、夫人があなたへの見張りをもう少しゆるくして、あなたを叱る方をもっとやっていたいのですが」とラブロック大尉は言った。

「あなたはきっとたくさん怖ろしいことをお望みですわね」と彼のお相手は、楽しげに手厳しく応えた。

「ああ、残念ながら、僕は望むようなことを何も得られないのです!」とラブロック大尉はため息をついた。

「君の望みはずいぶんいろいろあるに違いないね」とバーナードは言った。「僕には君はずいぶん楽しんでいるよう見えるんだが」

イギリス人は肩をすくめた。「君がおそらく想像しているよりは少ないよ。夫人は前よりいつも厳しく僕たちを見張っているんだ」と彼は、一瞬ヴィヴィアン夫人を見ながら付け加えた。「彼女が好きなのはゴードン・ライト君だけだ。彼女はゴードン・ライト君がとても好きなんだ」

「ああ、ヴィヴィアン夫人は賢明さを示しておられる!」とバーナードは言った。

「彼はたしかにとてもハンサムね」とブランシュ・エヴァーズは、実に可愛らしく挑むようにラブロック大尉を何度も見ながらつぶやいた。「ゴードン・ライトさんのことはとても好きですわ。一体どうしてあなたは、彼と一緒にここへ来られなかつたの?」と彼女は、バーナードに話しかけながら続けた。「あなたがたはいつも怖ろしいほどご一緒じゃないですか。これまであなたがお一人でいらっしゃるのを見たことはないと思いますわ」

「おや、僕はゴードンさんがお一人の時をしばしば見ていましたが」とラブロック大尉は言った。「つまりヴィヴィアンさんと一人だけで、という意味ですが。それが彼女のお母さんがお好きなことです。それがどれほど多くても、彼女は構いません」

若い娘は、いつもの可愛い姿勢で一瞬立ち止まって、彼を頭から足の先まで見た。

「まあ、それは破廉恥なことですわね！ 夫人が二人と一緒にさせたがっている、とおっしゃるの？」

「僕が言っているのは、あの若者は年収六千ポンドあるということです」

「彼の年収がいくらであると問題ではありません。年収六千ポンドは多くはありません！ それに私たちの国ではそういう風には考えません。私たちの国では、あなたの怖ろしい国で行なわれるような縁組など行ないません。アメリカの母親たちはイギリスの母親とは違うのです」

「ああ、もちろん誰でも分かります」とラブロック大尉は言った。「ゴードン・ライト氏がヴィヴィアンさんに死ぬほど恋していることは」

「私には分かりません！」とブランシユは叫んだ。

「彼は私よりたやすく死んでしまいますよね」

「あなたが死んだらいいと思いますわ！」とブランシユは言った。「ともかく、アンジエラはライト氏のことを死ぬほど恋してはいません」

「でも、彼女はやっぱり彼と結婚するでしょう」とラブロックはきっぱりと言った。

ブランシユ・エヴァーズはバーナードをちらりと見た。

「どうしてあなたはそれに対論なさいませんの？」と彼女はたずねた。「どうしてあなたはお友達の弁護をなさらないのです？」

「友人の弁護をしようとは思うのですが」とバーナードは言った。「ヴィヴィアンさんの弁護をしようとは思いません」

「あら、私はしましてよ」とブランシユはきっぱりと言った。「彼女は彼と結婚しないでしょ？」

「彼女が結婚しないなんてことがあるはずがありません！」とラブロック大尉は言った。「どういうおつもりですか」と彼は続けた。「アメリカでは美人の娘の母親が若い男の財産のことを気にしない、なんておっしゃるとは」

「あら、母親たちは気にしていませんわ。私たちはそんなことはおぞましいと思っています。ロングヴィルさん、そうではありますんこと？」とブランシュはたずねてきた。「これほどおとなしく聞いている人は見たことがありませんわ。あなたには愛国心がございませんの？」

「僕の愛国心は、一般論を語りたくないという気分によつて弱められているのです」とバーナードは笑いながら言った。「この点では、僕が一般論を述べないことをお許しください。個別の場合、すなわちヴィヴィアン夫人がゴードン・ライトの収入のことをとても頻繁に考へるかどうか、に僕は興味があります」

エヴァーズ嬢は不快感で頭を少しそらせた。「あなたがそれほどひどく公明正大なのでしたら、彼女におたずねになつたらいいですわ」

「それはいい考へです。彼女にたずねてみましょう」とバーナードは言った。

ラブロック大尉は自分の議論に戻った。「僕が文無しだという事実にあなたのお母さんは関心がない、とおっしゃるのでですか」

「関心がない、ですって？」とブランシュはたずねた。「とんでもありません。母はあなたを哀れむでしよう。

母はとても慈悲心があります。あなたに一シリング差し上げるでしょう！」

「お母さんはあなたが僕と結婚するのを許されないでしょう」とラブロックは言った。

「母は、結婚を妨げるのにたいして苦労しないでしょう！」と若い娘は叫んだ。

こうした言葉の応酬にバーナードは飽きてきた。「では、ヴィヴィアン夫人にたずねてみます」と彼は繰り返した。そして彼は、他の人たちが散歩を再開するにまかせた。

## 第十章

ヴィヴィアン夫人にたずねるのは良い考えだ、と彼は思った。しかし良い考え方で決して実行に移されないものは実にたくさんある。微笑んで挨拶しながら彼女に近づき、ちょっとお邪魔してもよろしいでしょうかとたずねる風に、彼女の隣の空いた椅子に腰をかけた時、彼は彼女がおそらく感じている当惑をおもしろく思い、探つてみようという衝動は和らいだ。彼はいまや、自分はもっとも当たり障りのない人間だということをただ彼女に示したい、という衝動だけをおぼえた。この申し出は、バーデンの天候や音楽や美点と欠点についてや、彼女が膝に乗せている本の価値について、いくつか賢い意見を述べるという形を取った。ヴィヴィアン夫人が当惑しているとしたら、狼狽しているとしたら、バーナードは彼女に申し訳なく思つただろう。生真面目な人生観を持ち、想像力が恐怖を感じやすい小柄なボストンの女性の道徳意識以上に、彼が敬意を抱くものはなかった。彼は彼女の道徳意識を潔癖さの寺院と見なした。その寺院の中では、人は爪先立ちで歩くべきであり、彼はヴィヴィアン夫人に、自分の歩みがどれほど軽やかか示したいと思った。彼女自身も無作法や無礼をはたらない人であった。しかし、不信の対象らしきものと真正面から向きあつた今、彼女は上品な寛大さを見せるいつもの態度に落ち着いた。彼女の本は、ヴィクトール・クーザン<sup>②</sup>の著作であつた。

「あなたはお考えを抽象化する並外れた力をお持ちに違ひありません」とバーナードは、彼女の本を見ながら言つ

た。「バーデンのクワハウスで哲学を学んでおられるのは、私にはまさに知的な離れ業に思えます」

「ここでは少し哲学が必要であるとは思われませんか?」

「せひとも必要です。私たちが持ち歩いているもので。しかしここで教科書を開こうとは思いません」

「ご自分が賢明でないかのようにお話になつてはいけません」とヴィヴィアン夫人は言った。「あなたはとても

ご賢明であると、皆さんおっしゃっています」

ロングヴィルは目をみはった。その言葉は予想外だったし、ヴィヴィアン夫人がお世辞を言いはじめるのも不釣合いだった。彼女がボストンの人であったとしても、堕落したボストン人である、ということを彼は思い起こそ必要があつた。

「ああ、ヴィヴィアンさん、皆さんということは誰でもないということです」と彼は笑いながら言った。

「特にライトさんです」と彼女は答えた。「あの方はいつも私たちにそうおっしゃっていました」

「彼は友情のために目がくらんだのです」

「そうですわね、あなたのお親しさは存じ上げております」とヴィヴィアン夫人は言った。「そのことについてもあるの方はおっしゃいました」

「彼が怖ろしく何でもしゃべる人とお思いですね!」

「よくお話しになる方だとは思っております。私たちはあの方のお話がとても好きです」

「彼の話は普段は素晴らしい」とバーナードは言った。「しかしそれはまったく話題によりけりです」「まあ」とヴィヴィアン夫人は言った。「話題はいつもある方に選んでいただいているのですが」そして突然考え事をして目を伏せながら、彼女は手にした本の皺になつた端を伸ばしはじめた。

ある神秘的な衝動によつてバーナードの心に浮かんだのは、ブランシュ・エヴァーズが今言つたばかりの疑問を夫人に尋ねる機会を、夫人が彼に突然与えようとしている、ということだった。他の二、三の考えも彼の心に浮かんだ。ゴードン・ライトが娘に話しかけるのを夫人は喜んでいた、とラブロック大尉は感じていた。そして大尉は、娘が年六千ポンドを受け取るのを見るのを楽しみにしている、とおぞましくも考えていた。バーナードはこれまで、エヴァーズ娘にそつこんのこの求愛者を決して明晰な理論家と思つていなかつた。しかし我々の友人は突然、大尉のことを靈感を受けた一人と見なすようになつた。ヴィヴィアン夫人の場合、ニューアイングランドの良心が陥る堕落の形態は、義理の息子候補の収入を過度に評価することだつたのだ。こうした発見の光に照らされると、他のすべてが明瞭になつた。ヴィヴィアン夫人はバーナードのようなつましい従者は嫌いだつた。それは彼には年三万ドルの年収もなかつたからである。また、考えをゴードン・ライトの大きな利点に集中させることができが、アンジエラの主な義務である時に、財産が僅かな賢い若者などは余分な気晴らしだつたからである。「賢いとおっしゃいましても、すべては比較の問題です」とまもなく彼は言つた。「ああ、ラブロック大尉が來ました。あの人もある種の賢さを持つています。彼は観察眼がとても鋭い」

ヴィヴィアン夫人は、何か考え方をしながら目を上げた。「私たちはラブロック大尉を好きではありません」と彼女は言つた。

「彼がすばらしいことを言つたのを聞いたことがあります」とバーナードは答えた。

「彼は粗暴だと私たちは思っています」とヴィヴィアン夫人は言つた。「ラブロック大尉を褒めないでください」「いや、僕はただ公正でありたいと思っているだけです」

ヴィヴィアン夫人は少しの間、何も言わなかつた。「公正でありたいと強く思つておいでですか?」と彼女は

まもなく言った。

「それこそ僕のもっとも強く願うことです」

「それをお聞きして嬉しいですわ。そして私はもちろんそれを信じられます」とヴィヴィアン夫人は言った。

バーナードは彼女に感謝して微笑んだ。しかし微笑みつつ、一体なぜ彼女は僕にお世辞を言い続けるのだろう、という深刻な疑問を、彼は自らに問うた。「あなたはいつも僕に優しくしてくださいました」と彼は声に出して言った。

「それはライトさんのためです」と彼女は控えめに言った。

私が今引用した言葉を話しながら、バーナード・ロングヴィルは、ある良心の呵責を感じつつ、自分が賢い厚かましさの縁をからうじて避けてきたように感じていた。しかしどの夫婦の静かなちょっとした返答は、彼女の厚かましさとは言えないにしても、彼女の賢さが彼の賢さとほとんど等しいことを彼に伝えた。彼女を正しく判断してこなかつた、と彼は独りごとを言った。

「何でもゴーデン・ライトのせいにされますね」と彼は、微笑み続けながら言った。

ヴィヴィアン夫人は少し顔を赤らめた。「それはあの方が、ここで私たちにとつて楽しいすべてのことの土台でいらっしゃるからですわ。ここへ来た当初はとてもひどい部屋をあてがわれましたが、あの方が来られるやいなや素晴らしい部屋を見つけてくださいました。それもお安く。それからロングヴィルさん」と彼女は、もの柔らかく優しく強調しながらつけ加えた。その言い方は、厚かましいという見方とまったく矛盾するかも知れなかつたが、その一方でバーナードの鋭くなつた感覚には、厚かましさに実に新鮮な色合いを与えているようにも思われた。「またあの方のおかげで、あなたが私たちの小さな一団に加わられました」

「ああ、決して忘れてはならない彼の功績の一つです。それを記念して碑版を付けるべきです。クワハウスの壁に！」バーナードは心の中でつけ加えた。「意地悪な人だ！」

ヴィヴィアン夫人は彼のおどけた皮肉にまったく動じないようだった。そしてゴードン・ライトにどれほど恩義があるか列举し続けた。「哀れな三人の孤独な女たちを紳士が助けてくださる方法は、たくさんあります。特にその方が、ライトさんのように親切で繊細でもある時には。の方がいらっしゃらなかつたら私たちはどうしていたか分かりません。そして皆さんそれをご存知でいらっしゃるようです。の方のことをずいぶん古くからのお友達のように思います。娘と私はの方をまったく崇拜しております。隠さずに申し上げますが、少し前におあなたがあの方と一緒にでなくこちらに来られるのを見たとき、私は大変がっかりしました。お加減が悪いのではありませんように」

目を伏せて、バーナードは座つて聞いていた。「いや、彼はただホテルで手紙を書いているだけですよ」「ヴィヴィアン夫人はちょっと黙っていた。「さぞかしたくさん文通しておいででしょうね」

「本当のところは分かりません。私が彼と一緒にいる今は、彼は普段より文通が少ないようです」

「そうですわね。あなた方が離れていらっしゃる時は、きっとお互にたくさんたくさんお書きになるでしょう。

でもある方は、仕事のお手紙もたくさんお書きになるに違いありません」

「おそらくそうでしょう」とバーナードは言った。「そしてもし仕事があれば、きっと彼は書くと思っていらっしゃるんでしょう」

「秩序と方法ですわ！」とヴィヴィアン夫人は大きな声で言った。「あれほど財産をお持ちですもの、そうした美点は必要です」

バーナードは彼女をちらつと見た。ああラブロック君、君は見かけほど馬鹿じゃないね、と彼は独りことを言った。「ゴーデンの美点はいつも必要です、本当に」と彼は続けた。「しかし彼の財産が莫大であるという必要がありますか?」

ヴィヴィアン夫人は反対を示すかすかな動作をした。「私に言わせないでください! そんなことは何も知りません。の方方がお金持ちだと思つただけです」

「彼は金持ちです。しかしクロイソス③ではありません」

「まあ、あなた方のような社交上手な若い方々は、贅沢の基準をお持ちです!」とヴィヴィアン夫人はちょっと笑いながら言つた。「貧困にあえぐ寡婦にとっては、ライトさんのような財産はすばらしく見えます」

「僕のことをそんな怖ろしい言い方で言わないでください!」とバーナードは声を上げた。「我々の友人は、たしかに十分なお金も余分もあります」

「それこそ私が言いたかったことです。一度あの方はご自分の財産についておっしゃる機会がありました。でもそれについて語られる口ぶりがとても慎み深く控えめだったので、どう考えたらいいのかほとんど分かりませんでした」

「彼は金持ちであること恥じてはいるのです」とバーナードは言つた。「きっとすべてを否定的に言つたでしょう」

「それこそ私が思つたことです!」この叫び声は、ヴィヴィアン夫人が意図したよりは熱を帶びていたかもしれません。しかしたとえそれほどではなかつたとしても、バーナードはそれを評価したい気分になつた。「あの方が遠慮がちなのを私たちには斟酌しなければ、と思つておりました。でもとても上品に言われましたわ」とヴィヴィ

アン夫人はつけ加えた。

「彼は幸せな男です」とバーナードは言った。「彼は上品さで評判がいいですし、また収入の全額でも評判です！」

「まあ」とヴィヴィアン夫人は、自分の言葉をより何気なく見せようとするかのように、軽やかに立ち上がりながらつぶやいた。「あの方のご収入の全額のこととは存じません」

彼女は立ち去ろうとしていた。そしてバーナードは、帽子を上げて彼女と別れながら、彼女の無知を啓いてやらずに彼女を行かせてしまうのはかなりひどいことではないか、と思った。しかし彼女は十分知っている、と彼は独りごとを言った。実際彼はリヒテンタール通り<sup>④</sup>を散歩し、この方向で考え続けた。ヴィヴィアン嬢がゴードン・ライトを好きであろうとなからうと、彼女の母親はゴードンの財産に魅了されていた。そして突然ある考えが彼女に浮かんだ。すなわち彼女は、娘の求婚者の友人を丁寧だが不信感をもって扱うのではなく、自分の精神状態を彼にほのめかし、彼の公平感に訴えることによって自分の状況を良くしよう、と思い至ったのだ。バーナードが友人の成功を望んでいる、とヴィヴィアン夫人が考えることほど自然なことはなかった。なぜなら、我々の思慮深い主人公が独りごとで言ったように、彼女が怖れるようになっていたのは、バーナードが彼女の娘を恋するようになることではなく、娘が彼を恋するようになることだったからだ。温泉場の生活が怠惰な精神を生みやすいことはよく知られていた。バーナードはアーチのかかった通りを半時間ほどぶらつき、この二つのありえない場合を交互に考えた。

一二三日後の夜遅く、ゴードン・ライトがホテルの彼の部屋に来た。「姉から手紙が来たんだ」と彼は言った。

「僕は行かなきゃならないだろう」

「ああ、残念だな」とバーナードは言つた。彼は現状を非常に楽しんでいたので、変化を望んでいなかつた。

「ほんの少しの間なんだが」とゴードンは説明した。「姉がイギリスから書いてきて、義理の兄が突然帰国せざるを得なくなつたというんだ。彼女もイギリスに残らないと決めていて、今から二週間で出航することになつて

いる。姉は出発前に僕にぜひ会いたがつてゐる。ふたたび姉にいつ会えるか分からないので、すぐに彼女のところに行つて、残る時間を彼女と過ごさなければと思つてゐる。こういうことで二週間ぐらいはかかるだろう」

「家族の絆は大事だと思うし、君の立場もよく分かるよ」とバーナードは言つた。「とはいえバーデンからフオ

クストンまで一気に行く旅は羨ましくないね」

「一気なのは戻つてくる時さ」とゴードンは微笑みながら大声で言つた。

「じゃあ、絶対帰つてくるんだね?」

「絶対さ。ヴィヴィアン夫人はもう一月ここにいる予定だ」

「分かった。じゃあ、君の不在で僕たちは寂しい思いをするだろう」

ゴードン・ライトはちょっと友人を見た。「では君はここに残るんだね? そうと知つて嬉しいよ」

「それは当然のことと思つていて。しかしそく考えてみると、君は何を勧めるのかな?」

「君が残ることを勧めるよ」

「ありがたい。君の言葉は法律だ」とバーナードは言つた。

「君にはあの婦人たちの世話をしてほしい」と彼の友人は続けた。「あの人たちだけにして置いていきたくないんだ」

「冗談を言つているんだろう!」とバーナードは叫んだ。「僕が誰かの『世話をしている』なんて君はいつ聞いた

たんだ？ 僕は自分の世話をするだけで精一杯だ』

「とても簡単だよ」とゴードンは言つた。「彼女たちには身近に男性がいる、と僕は感じたいだけさ」「いずれにしても彼女たちには身近に男性がいるだろうよ。献身的なラブロックがいるさ」

「だからこそ僕は、彼女たちの身近にもう一人男性がいてほしいんだ。彼はエヴァーズさんしか見ていない。ところが彼女は彼に飽き飽きしている。君は他の女性たちの世話をしてくれたまえ。君は彼女たちにとても心地よくなれた。彼女たちは君のことをとても気に入っている」

「ああ」とバーナードは言つた。「君が下品でおだてるようなことを言えば、僕はくずれる。君が僕の虚栄心をくすぐれば、僕は負けてしまう」

「それほど不快なことにはならないよ」とゴードンは、あいまいなユーモアを込めたつもりで言つた。  
「そりやそうさ。不快なことにはなるまい。毎朝、帽子を手に持つて、命令を伺いにヴィヴィアン夫人を訪ねるさ」

ゴードン・ライトは、両手をポケットに入れて物思う表情をし、部屋の中で何度も向きを変えた。「すごい機会だらうな」と、友人の前で止まりながら、とうとう彼は言つた。

「何の機会だつて？」

「僕の若い友人について結論に達する機会さ」

バーナードは穏やかにうめいた。「またそこに戻ろうというのか？ 僕はずっと前に結論に達しなかつたか？ 彼女は魅力的な娘だと僕は君に言わなかつたか？」

「君はそれを結論だと言うのか？ そんなことは初めて来た人でも一時間も経てば言えるさ」

「僕に何か違ったことをこしらえてほしいのか？」とバーナードはたずねた。「これより良いものはできないぞ」「君に何もこしらえてなんかいらない。僕はただ君に彼女を観察してほしい、まったく独立して彼女を研究してほしいんだ。君は彼女をまったくひとりじめできるだろう。僕が留守にするから君はまったく自由にできるだろう。ええい畜生」とゴードンは言い放った。「君はそれが好きだろう！」

「畜生、君は愉快な奴だなあ！」とバーナードは答え、抑えきれずに笑い出した。「そんな取り決めを君が提案するのは、僕の楽しみのためとは思わないが」

「コードンはまた部屋の中で向きを変えた。「そうさ、僕の楽しみのためさ。少なくとも、僕の利益のためだ」「君の利益のためだって？」

「僕はあらゆることを考えている。この前言ったように。そうした考えがみんな混じりあっている。だから新鮮な印象がほしいんだ」

「僕の印象は全然新鮮ではないが」とバーナードは答えた。

「君に少しでも善意があれば、つまり僕のジレンマを少しでも理解してくれたら、君の印象は新鮮になるさ」この言葉には非難の響きがありありとしていたので、バーナードは目をみはった。「君はどんなことでも真剣に考えないからな」と友人は続けた。

バーナードはできるだけ真剣に答えようとした。「君のジレンマは、あらゆるジレンマの中でもっとも奇妙なものだと僕には思える」

「そうかもしれない。しかし人によってものの捉え方はいろいろだからな。君には分からぬか」とゴードンは突然感情をほとばしらせながら続けた。「僕は怖ろしく心が引き裂かれているんだ。僕はアンジエラ・ヴィヴィ

アンがとてつもなく好きだ。しかし、それでいて、彼女が怖いんだ」

「彼女が怖いだって？」

「彼女が僕より賢いことが怖い。手ごわい妻になるのがさ。彼女が奇妙なことをいろいろするだろうと思うと」

「どんな類のことを？」

「そうさな、たとえば浮気をするかも知れないとか」

「それは男が心配することじゃない」

「自分の妻が自分を好きだと思っているなら、そうじゃないさ。それはそうだ。でも、僕はそんは思っていない。それは諦めているんだ。もしアンジエラ・ヴィヴィアンに僕を受け入れるように誘導できるとしたら、彼女は純粹に筋の通った理由によつてそうするだろう。彼女は単純にそれが最良だと考へるだろう。それは彼女に後悔する機会を与えるだろう」

バーナードはしばらく腰かけて友人を見ていた。「彼女は君より賢いと言つうのかい？　君より賢くなるのは不可能さ」

「おいおい、ロングヴィル！」とゴードンは怒つて言つた。

「僕は眞面目に言つてゐるんだ。君は非常に賢明なことをした。君は現実を僕に教えてくれたし、どう言つたらいいか、君がジレンマと呼ぶものの立派な性質を教えてくれた。そこで僕の新鮮な印象のことだが、それを聞いて君はどうしようと思つてゐるんだい？」

「そういうものは常に役に立つさ。そういうものを持つのは良いことだろう」

「ありがたいね。でも、それに基づいて何かするつもりなのか？　僕の新鮮な印象を聞いた結果で、ヴィヴィア

ンさんをつかまえるか放すか、つまりやり直すか諦めるか決めるつもりなのか？」

彼の心の動搖に皮肉な光を当てたにもかかわらず、この問いを聞いても、ゴードンはまったく動じない様子だった。「僕は自分が選んだことをするつもりさ！」と彼は言つた。

「それを聞いて気が楽になつた」とバーナードは答えた。「君のこうした考えは、結局のところ、科学的な精神のなせる業だな」

「選んだ結果によつては、僕は君にぴしゃりと反駁するよ」とゴードンは続けた。

「ああ、それを警告してくれてありがたい」とバーナードは笑いながら言つた。「この上なく誠実な判断でも、反駁される危険を少しは教えてほしいものさ」

「君の判断はこの上なく誠実な判断なのか？」とゴードンは尋ねた。

「非常に適切な質問だね。自分が選んだ女性を、オーブン・フィールド<sup>(6)</sup>のびのびとしたところで僕と二人だけにしておくのだから、君には嫉妬する理由ができると思わないのか？」

「嫉妬できればいいのに、と思うよ！」とゴードンは大声を上げた。「そうすれば事態は簡単になるだろうし、僕の気も晴れるだろうが」

そして翌日もう少し話し合つた後で、本当にこのような事態になることを希望して、彼はイギリスへ発つたようだつた。もつとも、彼はそれについては笑つていたが。

## 第十一章

ゴードン・ライトが出発してから三、四日というもの、バーナードは世話を託された女性たちをまったく見かけなかった。彼女たちは引きこもることを選んだのであり、彼はこの事實を、ゴードンのこれまでの献身を失つたことを嘆く表現、と勝手に解釈していた。彼にはバーデンに他の知り合いもいた。そこで彼はその人たちに会いに行き、彼らとつき合いながら、ヴィヴィアン夫人とその連れたちが再び現れるのをじっと待とうと努めた。

しかし四日目になると彼は、他の人たちは菓子屋の二階に住んでいる三人のアメリカ女性よりずっと面白みに欠ける、と意識するようになり、思い切つて彼女たちのドアを叩いてみた。彼女たちの世話をするように頼まれたのであり、この仕事をするためにはあらかじめ会つておく必要があった。彼は前日、かなり意氣消沈した面持ちでさまよっていたラブロック大尉に会っていた。そしてこの若いイギリス人は、ヴィヴィアン夫人の消息をバーナードに熱心に尋ねた。

「チエツ、あの人たちはきっとここから立ち去ったんだ。僕に何にも言わないで立ち去ったんだ！」とラブロックは叫んだ。

「いや、そんな。彼女たちはまだここにいると思うよ」とバーナードは言った。「友達のライトは一、二週間の予定でここを離れているけど、彼女たちはただ家の中にいると思う」

「チエツ、君の友人のライトが彼女たちを連れて行ってしまったと思っていたよ。彼はあの人たち全員を自分のポケットに入れているように見えるからな。彼が彼女たちに進軍命令<sup>(7)</sup>を出したと思っていたよ。彼女たちならきっと進軍しただろうさ。彼のポケットが怖ろしく好きなんだから！<sup>(8)</sup> 昨日あの人たちを訪ねていった。誓って言う

が、本当に行つたよ。彼女たちはちょっとした裏通りのパン屋に住んでいる。外国に来るとおかしなところに住むものさ！でも本当に、そこに着いても、彼女たちがそこにいたかどうかなんて、とても分かるもんじゃなかつたよ。僕はドイツ語が一言も喋れないし、そこにはパン屋のかみさんしかいなかつたんだ。ひどく野蛮な女で、僕の言うことは一言も理解できなかつた。自分の国の言葉はたっぷり僕に浴びせたくせに。僕は諦めざるをえなかつた。彼女たちは不在だったが、バーデンから立ち去つたかどうかは、僕には分からなかつた。もしここにいるなら、一体どうして姿を現さないんだ。バーデンに来て、菓子屋でじっとふさぎこんでいるなんて！」

ラブロック大尉は明らかにいらいらしていた。金貨がチリンと鳴つている向こうで運の向きが変わることが自分の気分の状態と関わっている、というのがバーナードの印象だった。しかし幸いにも、ヴィヴィアン夫人と娘は外出していたが、その連れ、「一番若い女性、小さな若い女性」が二階の居間にいることを、彼はパン屋のおかみさんから確かめた。

ブランシュ・エヴァーズは本を手にして窓辺に座っていた。しかし彼女はそれが面白くなかったことを示す素早さでその本を放り出し、いつものように素直にお喋りを始めた。

「まあ、どなたかにお会いできてうれしい、と言わなければなりませんわ！」と若い娘は、鏡の前を通り過ぎる時に、魅力的な髪の一房に触れながら声を上げた。

「たとえそれが僕だけでも」とバーナードは、笑いながら言つた。

「そういうつもりではありませんでしたわ。あなたにお会いしてとてもうれしいことは確かです。もう今まで、あなたもきっとお分かりになつたと思います。つまりどなたかと、特に男の方とお会いしてうれしい、という意味です。そんなことを言うのははしたない、とは思います。とりわけあなたに対して言うのは！でも、私が何

人かの男の人よりもあなたのことの大事を思っていることはお分かりでしょう。どうしてとりわけあなたに対して、ですって？ そうね、それはあなたがいつも私に利用したいと思わせるからですわ。卑しい利用という意味ではありませんでした。あなたが何かひどいことをなさる、と言って責めていたわけでもありません。私も利用したいのです、本当に。できるならいつでも利用しますわ。あなたがここにおられる、ということを私が利用していることがお分かりでしょう。私には言いたいことが沢山あるのです。この三日間、一言も話をしません。楽しい変化だと思いますわ、男性の訪問なんて。突然私たちは喪に服しました。誰が死んだのか、私には分かりません。ゴードン・ライトさんがお亡くなりになつたの？ ヴィヴィアン夫人のお考えです。私のじゃありません。私たちがクワハウスに行き過ぎた、と思っているのです。そこが良くないところと彼女が思つてゐるのかどうかは、分かりませんけど。もし良くないところだとしたら、もうすでに害が及んでいます。私は今以上に悪くなることはできないほどです。あらゆる不道徳な人たちを見ましたし、名前も全部覚えました。ラブロック大尉が何度も何度も彼らの名前を教えてくれました。<sup>⑤</sup> ここに閉じこもつて彼らの名前が耳の中を駆けめぐる、という状態にどんないいことがあるのか分かりません。私はお付きあいの方が好きだと言わねばなりませんわ。もう四日もクワハウスに行っておりません。遠乗りに出かけただけです。果てしない遠乗りに行つてきました。國中のあらゆる古い廃墟を見てきましたと話しています。ヴィヴィアン夫人とアンジェラは怖ろしく風景が好きなんです。<sup>⑥</sup> 風景のことならずっと話しています。山や木のことを、まるで自分たちが知つてゐる人たちのように、まるで男の人たちのように話すんです。つまり山や木が紳士であるかのように、という意味です。もちろん風景はすばらしいのですが、木と一緒に歩けませんものね。とにかく、それが私たちのお相手のすべてでした、木の葉がです！ 木の葉と女性です。でも女性って一種の木の葉だと思いますわ。いつもさらさらと音を立てていて、舞い

降りるんです。私が今日の午後はあの人たちと出かける気になれなかつたのは、こういう理由でした。彼女たちはウォーターワース家の人たちに会いに行きました。ウォーターワースさんたちは昨日着いて、どこかのホテルに滞在しています。娘が五人いて、みんな未婚ですの！ 彼女たちがどんな木の葉なのかはわかりません。何か変わつた種類で、舞い降りないのです。もう女性たちとのおつき合いは十分と思いましたの。三人の女がいつもくつづいているなんて！ 若い娘が女性としかおつき合いしないなんて、いいことは思いませんわ。怖ろしく限られていますわ。女性たちの弁護をして、私たちと一緒にいれば私たちに足りないものはない、とあなたに言わなければ、とは思います。でもあいにく、私たちには足りないものばかりです！ 女性の話は、本当に限られています。誰もがそれを分かっています。母がヴィヴィアン夫人に私の世話を頼んだ時に、それこそまさに彼女が望まなかつたことです。おや、ロングヴィルさん、何を笑つていらっしゃるのです？ あなたはいつも私を笑つておられる。母は私が無制限であるように望んだ、とあなたはおっしゃるの？ いえ、母は私が狭量になることを望まなかつたんです。私にたっぷりと会話をしてほしいと望みました。私が社交にふさわしくなることを望みました。それが母の望みでした。母は私に気軽にそれを身につけてほしいと望みました。若いときにそれを身につけないと、まったく身につかない、と母は思っています。私がバーデンに行くと思うと、母はとても幸せでした。でもこの四日間私が過ごしたような生活を、母は決していいとは思わないでしょう。こんなのは気軽な作法を身につけるやり方ではありません。自分と同じ性の人間二人と小さな居間で一日中座つてゐるなんて！ もちろんヴィヴィアン夫人の影響はあります。それはすばらしいものです。それは花の香りのようなものだと、母は言つていました。でも一日中花の匂いをかいでいたいわけではないでしょ。たとえとても甘い匂いであつても。それこそ頭痛になる一番の近道ですわ。花で思い出しましたが、ラブロック大尉が生きているのか死んでいるの

か、お聞きになりまして？ の方を花と呼びましょうか。いいえ、の方は植木鉢ですわ。の方はいつも、きれいな植物をボタン穴に挿しておられます。この十年というもの、わたしのそばに来ていません。こんな無作法なことは聞いたことがありません！」

ラブロック大尉は翌日訪れた。一度目に訪問した際、バーナードは大尉がヴィヴィアン夫人の小さな居間にいるのを見た。今回は他の二人の女性たちも在宅であり、バーナードだけがエヴァーズ嬢のお相手をする責任を負っているわけではなかった。しかしながらラブロックが主に話しかけていたのは歓待すべき彼女に対してもあり、この若い女性に付いて、菓子屋の窓の上に張り出している小さなバルコニーへと向かった。ヴィヴィアン夫人は居間の窓の一つに向かい、座つて書き物をしていた。そこでバーナードはアンジエラに話しかけた。

「あなたから目を離さないようにと、ライトは僕に言いました」と彼は言つた。「でもあなたは、僕の監視の及ばないところにいたいと強く思つておられるようですね」

「あなたはお発ちになつたと思っていました」と彼女は答えた。「お友達がお行きになつたんですから」

「とんでもありません。ゴードンは楽しい奴ですが、彼だけがバーデンの魅力では決してありません。その上、僕はあなたの面倒を見る、あなたのお世話をすると、と彼に約束しました」

娘はしばらく黙つて、横目で彼を見た。

「おそらくそのようなことを、あなたはいくらか既になされた、と思っていました」と彼女はまもなく言つた。  
「ゴードンがそのように頼むのは、もちろん極めて自然でした」

アンジエラは立ち上がり、顔をそむけた。彼女は部屋を歩き回り、窓のひとつに立つた。バーナードには、その動作が唐突であり、特に優美とは思えなかつた。しかし彼は、簡単にけんつくを食つ若者ではなかつた。彼は

彼女のあとに続き、彼らは次の窓——バルコニーへと開けた長い窓——に立った。エヴァーズ嬢とラブロック大尉が手すりにもたれかかり、通りを見ながらその光景を非常に面白がっているようだった。

「あの方がそのように頼むのが自然だったかどうかは分かりません」とアンジエラは言った。

「これ以上自然なことがありえたでしょうか？」彼があなたにこれほど献身的である以上

「彼女は一瞬ためらった。それからちょっと笑いながら言った。「あの方は、私たちを閉じ込めて、口を閉ざしていいべきでした」

「あなた方を閉じ込めるのは容易ではありません」とバーナードは言った。「ライトがあなた方に大きな影響力を持つていることは僕も知っていますが、結局のところあなた方は独立した存在ですから」

「私は独立した存在ではありません。もし母とライトさんが一人して私を安全な場所に置いておこうとされるなら、お二人にはたやすくそれができるでしょう」

「あなたはそのようなことをなさるうとしていた、と見えましたが」とバーナードは言った。「あなたは怖ろしく見えにくかった」

「それはあなたが私たちに対して何か企んでいると思っていたからですわ。つまり私たちの世話をしようと見張つておられる、と思っていました」

「矛盾したことをおっしゃいますね！ 僕がバーデンから立ち去ったと思っていた、とたつた今おっしゃいましたよ」

「それはうわべの、型どおりの言い方でした。女性はいつも訪問者に、その人に最近会っていないことに気づいていたというふりをするために、その種のことを言うとされていませんか？」

「あなたにお別れを言いに来ないで僕がバー＝デンを去ったはずがない、ということはお分かりでしょう」とバーナードは言つた。

娘は何も答えなかつた。彼女は外の日当たりの良い、坂になつてゐる「つごつと舗装されたドイツの通りを立て見ていた。

「今は私たちのお世話をしてくださいでいるわけですか？」と彼女はまもなく尋ねた。「そのお仕事は始まつていますか？ このニュースを聞きましたか、お母さん？」と彼女は続けた。「ライトさんが私たちをロングヴィルさんに引き渡して、私たちは呼ばれるまでじつとしていなければならなかつたのを、お母さんご存知でした？」

ライトさんが私たちを呼び出さないとしたら！」

ヴィヴィアン夫人は書き物机を離れ、バーナードの方に微笑みかけ、揉み手をしながらやつてきた。

「そんな心配は無用と思ひます」と彼女は言つた。「近くに紳士がおられて私は本当に嬉しく存じますわ。ロングヴィルさん、あなたは上手にお世話をしてくださいますわね。娘には、あなたのご判断を信頼するように勧めます」そしてヴィヴィアン夫人は、彼に強烈な——訴えるような、ほんと痛ましいまでの——微笑を投げかけた。

「あなたのご信頼には強く心を打たれました。その信頼に値するような、思いつくあらゆることをいたします」と若者は言つた。

「ああ、お母様の信頼はすばらしいのですわ！」とアンジェラは声を上げた。「お母様の信頼のようなものは、決して他にありませんでした。私はまったく違います。私には信頼などありません。それに、私は小包のように預けられたり、珍しい動物のようにじろじろ見られたりするのは好きではありません。私は自由がとても好きな

のです」

「あなたが矛盾したことをおっしゃるのは、これで二度目ですね」とバーナードは言った。「自分は独立した存在ではなかつた、と今おっしゃつたばかりです」

アンジエラはすばやく彼の方を向き、微笑みつつ顔をしかめた。「あなたは確かに見張つておいでですわ！もう始まつているのが分かります」

ヴィヴィアン夫人は優しくたしなめるようにつぶやきながら、手を娘の手に置いた。娘はかがんで彼女にキスした。「これは私が動搖している結果だと、お母様ならおっしゃるでしょう」と彼女は言つた。「私が神経質になつていて、自分が何を言つているのか分からぬ。ライトさんがお発ちになつたことで動搖していると思われているのです。そうでしょう、お母様？」

ヴィヴィアン夫人は、控えめながら厳しくむこうを向いた。「知りませんわ、お前。お前のことはよく分かりません」

アンジエラの頬にはかわいらしいピンクの赤みが差しており、目にははつきりと光が見えた。見事なほど美しく、バーナードは率直に彼女を見つめた。彼女は一瞬彼の視線を直視し、それから言葉を続けた。

「ロングヴィルさんも私のことを分かつておられません。私が本当に動搖していることを知つていただかなければ」と彼女は続けた。「時々私には馬鹿なことを言つた瞬間があります。バーデンの空気のせいだと思ひます。人をあまりに興奮させます。私がこうなつたのはほんの最近です。あなたがお発ちになれば、私はひどく恥ずかしく思うでしょう」

「バーデンの空気があなたにそのような影響を及ぼしているとしたら」とバーデンは言つた。「あなたが友人の

「そうかもしません。でも、今申しましたように、私には信頼というものはありません。誰に対しても何についても。だから、しばらくの間、世の中から身を引きます。隠遁いたします。お母様、静かにしていましょうね。」

この三、四日はまったく魅力的でした。小包は留め置きにします。小包は触れられない方がずっと安全です。比喩的に言って、あなたがおっしゃったように私たちのこの世での摂理であるライトさんが私たちに鍵をかけられた、と思うことにします。私は閉じ込められました。バルコニー以外には外へ出ないようにいたしましょう！」

こう言いながら、アンジェラは細長い窓から外へ出て、エヴァーズ嬢の横に立った。

バーナードは非常に面白く思つたが、また非常に困惑もした。哀れなライトがこの若い女性の性質を完璧に読み解けるページとは思わなかつたとしても不思議ではない、と彼にも思われた。彼はヴィヴィアン夫人と部屋の中によどまつた。彼は当惑しつつも愛想よく微笑みながら、夫人を立つて見ていた。夫人は向きを変えた。しかし娘が外へ出たのを見て、彼女は、熱心さが思慮によつて和らげられたといつたいつもの様子で、ふたたびバーナードの方に近寄ってきた。シエナの草生したテラスでアンジェラが背中を向けてしまつた後で、今と同じように謝ろうとしている母親と対面していたあの時の光景が、突然彼の心に浮かんだ。あの光景の記憶を完璧なものにしたのは、ヴィヴィアン夫人が同じ言葉を発しようとしたことだった。

「きっと変わつた娘だとお思いでしょうね」

バーナードはその言葉を覚えており、軽く笑つた。「初めてお目にかかつた時も、奥様はそうおっしゃいました。イタリアの街のあの静かな片隅で」

ヴィヴィアン夫人は、年配でやつれたなりにかすかに顔を赤らめた。

「そのことはおっしゃらないでください」と彼女は、開いた窓を見ながらつぶやいた。「あれは旅先のちょっとした事故でした」

「僕はそのことを話したくてたまらないのです」とバーナードは言った。「あれは僕にとってはまったく魅力的な事故でした！せめて教えてください。僕のスケッチを取っておかれましたか？」

ヴィヴィアン夫人はさらにはつきりと顔を赤らめ、また窓の方を見た。「いいえ」とだけ彼女はささやいた。

バーナードも窓の外を見た。横から見えるアンジェラは、バルコニーの手すりにもたれていた。それはちょうど、彼が描いている間、シエナの磨かれた欄干にもたれて立っていたのと同じ姿だった。若い男の目はちょっとの間彼女にとまつた。それから母親の方に視線を戻して、「彼女は持つておられますか？」と彼は尋ねた。

「分かりません」とヴィヴィアン夫人はきっぱりと言った。

そのきっぱりとした様子は度を越していた。それは自分の誠実さが試されている、と思う彼女の困惑を表していた。「ピューリタンの愛すべき娘だな。小さな嘘さえつけない！」とバーナードは独りごとを言つた。そしてこの嬉しい結論を得て、彼は彼女のもとを辞した。

## 第十二章

この物語の早い段階で、彼は默想にふける思索的な性向をした若い男である、と確認されていた。そしてクローハウスのテラスにひとりで座り、そこをよく訪れる人々に聞まれながらも沈思黙考に没頭していたその夜の一、二時間ほど、彼がその性格の通りだったことはおそらくなかつた。その場所は動きと騒音に溢れていた。しかし

彼は、オレンジの木の大きな緑色の箱に椅子を傾げてもたせかけていた。そしてこのような気楽な姿勢で音楽を漠然と心地よく意識しながら、夜の星がちらばった天上に視線を向けた。知っている人々が行き来していたが、彼は誰にも言葉をかけなかつた。ひとりでいたかったのだ。自分ひとりでも興味がつきなかつた。とても幸福で、面白く、奇妙なほど心を奪われていた。この感覚は妙なものだつた。知的な興奮の性質を帯びていた。自分の知力の使い方について白紙委任状を受け取つたような感覚だつた。バーナードは自分の知性が活動していると感じるのが好きだつた。これはおそらく、賢い男の最高の贅沢だろう。今のところその知性は、アンジェラ・ヴィヴィアンの行動の奇矯さという領域全体に活動していた。なぜなら、午後に訪問して以来、その光景がかなり広がつたとバーナードは感じていたからだ。彼はまた、哀れなゴードンの苦境はけつして異常なものではないと思うようになつた。ロングヴィルは友人のジレンマを実に眞面目に考えはじめていた。あの娘はたしかに不思議な研究対象だつた。

夜も終わりに近づき、バーナードのまわりでぶらついていた群集も分散していった。クワハウスの明るい窓は森の暗闇の中でまだ輝いており、テラスに沿つてランプはまだ火が消されていなかつた。しかし広い散歩道にはほとんど人気がなかつた。ここかしこにまだ残つてゐる二人連れだけが——葉巻の赤い先端と明るいドレスのぼんやりとした光沢が——、この場所に生氣を与えていた。しかしバーナードはまだ、オレンジの木の下で椅子を傾けながら座つてゐた。想像力がはるか遠くまでさまよつていて、彼はそれが匂いに戻つてくるのを待つていたのだ。しかし立ち上がるうとしたその時、彼は三人の人影が——遠くからでもなじみのある雰囲気を漂わせた人影が——テラスの人気のない広がりの中をこちらにやつてくるのを見た。彼はただちに椅子から立ち上がり、十歩ほど歩いて、アンジェラ・ヴィヴィアン、ブランシュ・エヴァーズ、そしてラブロック大尉であると認めた。

まもなく彼はテラスの真ん中で彼らと会った。

真夜中の散歩に来ました、とブランシュはただちに告げた。「そしてもしあなたが不穢當だとお考えになるのだったら申しますが」と彼女は声を上げた。「私の発案ではありませんのよ。ヴィヴィアンの思いつきです」

「失礼ですが、僕の発案です」とラブロック大尉が言った。「その名譽はいただきたいものです。僕がそれを思いついたのです。僕なしでは、あなたがたは決しておいでにならなかつた」

「あなたがご一緒より、ご一緒でない方が、もっと穏当だったと思ひますわ」とブランシュははつきり言つた。

「あなたは自分が怖ろしい性格だとお分かりでしょう」

「あなたとご一緒の時より、あなたから離れている時の方が、僕はずっと悪くなります」とラブロックは言つた。

「あなたが僕に規律を守らせてくださいます」

若い娘は軽い叫び声を上げた。「あなたが規律と呼ばれるものなんて知りませんわ！ あなたは今夜のあなたより悪くなりようがありません」

アンジェラはこれを聞いていなかつた。彼女は少し顔をそむけ、人気のない庭を見ていた。

「あなたが矛盾したことをされるのは、今日三度目です」と彼は言つた。静かに話しさしたもの、彼は彼女に近寄つた。しかし彼女は彼の言葉を聞いていないようだつた。彼女はむこうを向いた。

「あなたもいらっしゃればよかつたのに、ロングヴィルさん」とブランシュは続けた。「とても楽しい夜でした。氷を食べながら夜じゅうヴィヴィアン夫人のバルコニーに腰掛けっていました。氷を食べながらバルコニーに腰掛ける、これこそ私の考える天国ですね」

「天使が横にいて、ですね」とラブロック大尉は言つた。

「あなたは私の考える天使ではありません」とブランシユは言い返した。

「あなたは天使が本当はどんなものか決してお分かりにならないでしょう」と大尉は言った。「だからエヴァー<sup>ズ</sup>さんはヴィヴィアン夫人に言ってパン屋の二階に部屋を借りさせたのです。つまり一日に何回も氷を上へ持つてこさせることができるんです。そうですね、パン屋の氷は悪くないと言わねばなりません」

「氷が焼いてあることを考えね、でも氷は精神に影響を与えます」とブランシユは続けた。「ラブロック大尉の精神にも影響を与えたかもしませんが。でも彼には精神がありませんもの。氷は確かにアンジエラの精神に影響しました。夜の十一時に散歩に出かけることを思いつかせたのですから」

アンジエラはこの巧みな皮肉に対し自己弁護などまったくしなかった。彼女はただ上の空といった様子で、優美に立っていた。バーナードは、彼女が自分を見るとも、自分に話しかけるともしないのに、漠然と苛立つていた。彼女の無関心は、ゴードンが彼に伝えていた批評する権利への反論のように見えた。

「十一時には人は寝るものだと思っていました」と彼は言つた。

彼に視線を合わさぬ、アンジエラはあたりを見た。「彼らは行ってしまったようです」

エヴァーズ嬢は歩き続け、彼女の大尉ももちろん彼女と歩みをともにした。それゆえバーナードとヴィヴィアン嬢は残され、二人で立っていた。彼は一瞬黙つて彼女を見た。しかし彼女の目はまだ彼の目を避けていた。

「あなたは見事なほど矛盾しておられますね」とバーナードはまもなく言つた。「今日の午後、隠遁すると厳かな誓いを立てられています。そしてその誓いを立てられるやいなや、このような常軌を逸したやりかたで誓いを破ろうとなさる」

彼女は、今度は彼を見た。長いあいだ、これまでにないほど長く彼を見た。

「これは試験の一部だと思いますわ」と彼女は言った。

バーナードは一瞬ためらった。「何の試験です?」

「あなたが試みられた試験です、ライトさんのために」

「それについてあなたは何をご存知なのですか?」

「あら、ではあなたはそれをお認めになるのですね?」と娘は、元気に笑いながら声を上げた。

「僕はそんなことは認めません」とバーナードは言つた。一瞬だけ友人への忠義の義務を意識し、ここでの否認はただ名誉の問題だと感じていた。

「私はあなたの否認より自分自身の確信の方を信用します。あなたの優れたお知恵と豊富な経験を私に向けさせることを、あなたは約束されたのです! そういう取り決めでした」

「僕たちのことを小賢しくふるまうと思っていらっしゃるのでしょうかね」とバーナードは言つた。

「ほらごらん下さい。あなたはすでに私が考へてることに答えようとなさっています。ライトさんが戻つてこられたら、私が『常軌を逸してゐる』と彼にお伝えできますわね!」そして彼女は向きを変え、ゆっくりと友人たちの後を追いながら歩き続けた。

「僕が彼に言うことなど、あなたは何を気にされるのです?」とバーナードは尋ねた。「あなたはまったく気にされていない」

彼女はしばらく何も言わなかつた。それから突然、目を伏せて立ち止まつた。

「お言葉ですが」と彼女は実に穏やかに言つた。「私は大変気にしています。そのこともあなたはご存知のほうがよいと思います」

バーナードは立つて彼女を見ていた。彼女の目はまだ伏せられていた。

「僕が彼に何と言つてござ存知ですか？ 夜のおよそ十一時にあなたは特に魅力的になられる、と彼に言つつもりです」

彼女はふたたび一、三歩進んだ。エヴァーズ娘とラブロック大尉は向きを変えており、彼女の方に来つた。

「私が常軌を逸しているのはまったく本當です」と彼女は言った。「こんな時間に外出するなんて、極めて愚かで趣味の悪いことでした。母はまったく喜んでいませんでしたし、私は母にひどいことをしました。私はただ散歩がしたかっただけです。もう戻りますわ」他の人たちがやつてきた時、彼女はこの意思を伝えた。そしてラブロック大尉とそのお相手が激しく抗議したとはいえ、彼女は自分の意見を通した。バーナードは反対しなかつた。彼は、彼女とほとんど無言で母親の住居へと歩いて戻ることで満足だった。曲がりくねった細い通りは静かで人気がなかつた。ブランシュとお付きの伊達男のおしゃべりと笑い声以外には物音はなかつた。アンジェラは何も言わなかつた。

この出来事は、バーナードの心にはじめは一種の宣戰布告のように映つた。娘は、自分が好奇な觀察の対象になることになつっていた、と推測していたのだ。この考えは、彼女の独立心の強い精神にとって楽しくはなく、彼女は大胆にも防衛の構えを取つた。彼女は可能なあらゆる手段によって——彼を困惑させ、回避し、欺くことによつて、わかりやすくいえば彼を馬鹿にすることによって——彼の目的をくじく権利が自分にはある、という立場に立つていた。これが、ここ数日間バーナードが彼女の態度を見て下した解釈だった。同時に、彼の心の中に起こつたことを推測したとは彼女はきわめて賢い、と彼は思つた。彼女は彼の批評的な態度について、彼に大い

に恥じ入らせた。そして彼女に警戒を解かせ、さしあたり観察者をやめたと彼女に納得させるために、彼は考えられるあらゆることをした。時折、彼の立場は彼には忌まわしいものに思われた。なぜなら彼は、彼の友人が求婚した女性との間に、俗悪な恋愛遊戲のようなものは行なわないようにして、と強く決心していたからだ。このような状況では、彼らがお互いに不和になる——それは事実上決定的に差し迫った結末のように思われた——ことは、恋愛遊戲の氣味も俗悪の氣味もあった。自分が取れる唯一の行動方針はただちにバーデンを離れることだろう、とバーナードは独りごとを言つた。しかし彼にこの決心を変更させるにいたらしめた事実について、私は恥ずかしながら述べなければならない。要するにそれは、ヴィヴィアン嬢の警戒を解かせるのに本当に成功したと彼が考える気になった、ということである。どうしてそんなことができたのかを彼が説明しようとしても難しかつただろう。なぜならこの一週間、彼は彼女と何やかやと何時間も話をしていたのだから。彼女の警戒心を解くのにもっとも効果的な方法は、彼女をひとりにしておくこと、彼女と会話するという特権を誓つて諦めること、その間他の人たちとつき合うことだつただろう。この方法には、これほど巧妙な方針の作用を測ることができないという欠点があつただろう。そしてバーナードは、成功している時は何よりもそれを知りたかったのだ。いずれにしても彼は今成功していると信じていたし、彼が会話したことそれ自体が、彼が彼女のことを持たく思っていない、とこの銳く賢い娘に納得させたのだ。彼の態度の懇懃な無関心さ、彼が選んだ話題の抽象的な性質、彼の言及の関連性のなさ、そして彼の注目の曖昧さ、こういったものすべてがこの結果に寄与したのだ。このような結果はたしかにすばらしいものだった。なぜならヴィヴィアンが実際絶えず彼の考えの中にいたと仄めかすことはほとんど余計なものだったからだ。彼は彼女のことを考えないことを忘れなかつた。しかし良心がもつとも活動している時、彼は彼女のことでもつとも考えていた。バーナードには良心があつた。その良心は、

動きが少し不規則とはいえ、長い目でみれば非常な運動量があった。しかし好奇心が強く、想像力に富み、大膽であり、その奇妙に鋭敏な知性のはたらきが、すでに私が述べたように、人を楽しませるとはいえ、彼が一種の無意識の実験に没頭したことほど自然なことはなかつただろう。「彼女を一人にしておこう。彼女から何か引き出そうなんてするものか!」、と彼は独りごとを言つた。そう言いつつ彼は遠くまで歩き回り、私的な印象を手にいっぱい芳しく摘み取るのだった。彼の人となりと状況を考えると、すでに述べたように、こうしたことすべてが自然だった。ただ一つだけ妙だったのは、彼が有利な立場を放棄したと、もつとも利害関係のある人物に納得させることができた、と考えたことだった。

ゴードン・ライトが帰つてきたらあなたが私のことを何と言つて、を私はとても気にしています、と彼女が言ったのを彼は覚えていた。そして彼はこの言葉が大変重要だと感じた。このあと、彼女は自分からは決してゴードンについて話さなかつた。もしゴードンがふたたび求婚したら受け入れます、と彼女は母親に約束した、そして彼女の心が問題にされていない以上、彼女は見通しにベールをかけておきたいと思つてはいる、とバーナードは心に決めた。「彼女は彼のお金のために彼と結婚しようとしている」と彼は言つた。「なぜなら母親がこのことの様々な利点を明らかにしたからだ。ヴィヴィアン夫人の説得力が勝利した。自分が彼を愛していないことは問題ではない、と娘は自分に信じ込ませたのだ。たぶん問題ではないだろう、彼女にとつては。このような場合、自分を女性の視点に置くことは難しい。しかし哀れなゴードンにとっては、いつの日いか問題になるだろう。それが彼の幸福に影響を与える、と彼女は思わざるをえない。だから彼女は、自分が彼にとつて必要以上に悪く見えることを望まないだろう。彼女は僕に彼女のことを行く言つてほしいと思っている。もし彼を騙すつもりなら、彼女は僕に支持してほしいだろう。この希望はもちろん自然なことだが、誇り高い娘がするにはかなり妙なお願いだ。

そうだ、彼女は誇り高い娘だ。金目当ての結婚をすることと自分の良心とを折り合わせることができたとしても。僕に援助を期待することは、たぶん僕を友人として扱うことだろう。しかし彼女が覚えておくべきことは、少なうとも僕が覚えておくべきことは、ゴードンが彼女より古い友人だということだ。旧友を裏切ってでも自分を助けてほしいと僕にもちかけるなら、そこには少々厚かましさがないだろうか』

バーナードの黙想はこの若い女性にとってかならずしも好意的ではなかつた、と推測されるだろう。そして彼女の行動には冷笑的な要素があると彼が強く印象付けられた、とはつきり言っておかねばならない。クワハウスへのいわゆる真夜中の散歩の夜、彼女は突然優しく従順であるという響きを奏でた。そしてこの響きはその後たびたびの頻度で現れることになった。彼女は淑やかで、近づきやすく、優しくも上品で、表情に富み、感情を表し、ほとんど人をおだてるようだつた。彼個人の見方からすれば、この娘の淑やかさに対したとき何の不満もなかつた。しかし彼は、自分は問題ではなくすべてがゴードンの要求という観点から見られなければならない、と思ひ起こし続けた。この時の彼の見方には、いつも不合理な論理的ひねりがあつた。まず第一に、彼は判断すべきでなかつた。そして第二に、彼は厳密にゴードンのために判断すべきだつた。前者の条項が抑止力としてはたらかなかつた時、後者がつねに弁明としてはたらいた。あの娘についてあまりに考えすぎると自分を責める時、自分はよく考えているわけではないと思って、バーナードは慰めを得た。彼女は極めて賢い浮氣娘だということが、もっと敬意をもつた予断という表面的な複雑さを通して、次第に心の中に滲されるにまかすこと、これこそまさによく考えないことであつた！ アンジェラ・ヴィヴィアンの浮気っぽさが異なつた評価を受けるような別の状況を、バーナードは垣間見たことがあつた。しかし今それは、ライトの帳簿の貸方に記入すべき事項ではなかつた。こう考えて、精神的な意味でバーナードはペンを拭いた。そして自分が、賄賂のきかない誠実さをもつ

た白髪混じりの帳簿係になつたように感じた。すでに述べたように、彼は彼女と実にしばしば会つた。閉じこもるという誓いを、彼女は破り続けた。そして二週間後にはその誓いを、目に見えないほどの破片にしてしまつた。別々の四度の機会に、バーナードがヴィヴィアン夫人の住居に行つてみると、アンジエラが一人でいた。彼女は歓迎の挨拶をして、このような状況でもアメリカ娘ならもつとも雄々しい訪問客でも自由に迎えるように、彼を迎えた。彼女は微笑み、話し、魅力的な陽気さに身を委ねた。それゆえ今少なくとも彼女はまさしく警戒を解いている、としかバーナードには言えなかつた。幸いなことに彼は一人だつた！　さらに魅惑的にくつろいだ機会にも一人だつたことを、彼は喜んだ。あるときは夜分に、彼女は彼と二人でクワハウスの敷地へと散歩を行つた。音楽はより甘美な静寂さの中に沈み、暖かい夜風にかきたてられたシユワルツ<sup>（ブランク・クワルツ）</sup>アルトの木々の梢のつぶやきは、ほとんど聞き取れるほどであつた。またあるときは、長い午後の時間、彼らは他の人たちと離れて森の中を歩きまわつた。ヴィヴィアン夫人や、夫人が世話を約束した愛想のよい人、すなわち制止しきれず常に存在するラブロックの不眞面目な称賛の対象とも離れて、であつた。二人はこのとき絶えず森の中でパーティーをしていた。バーナードがガイドブックで調べておいた景勝地へと、小高い山々に馬車を走らせた。このようなことに関してバーナードは実に機敏で理解が早かつた。彼は遠出を整えるのに意外な才能を發揮し、大きなドライブの四輪馬車<sup>（ランド）</sup>の赤いチョッキの所有者を定期的に雇つていた。その馬車は従者の席が後ろについていて、いつもご婦人方の命令を待ち受けていた。赤いチョッキの男はすばらしい御者だった。彼はいつも新しい遠出を提案し、我々の小さな一行に次々とロマンティックな風景を紹介した。

### 第十三章

一週間以上が過ぎたが、ゴードン・ライトは現れなかつた。そしてバーナードは突然、バーデンを発とうと決心した。彼はヴィヴィアン夫人と娘が、実に都合よく、心地のよい質素な城の庭にいるのを見つけた。その城はバーデン大公<sup>(1)</sup>が我々の物語の舞台を訪れる際には住居にしているもので、小さな町のすぐ上の山腹にあり、魅力的な古い低木や高台にかこまれていた。この庭には一般人も入ることができ、この場所が好きなバーナードは一度ならず訪れたことがあつた。高台の一つには高い欄干があり、アンジェラはそこにもたれて谷を見ていた。はじめヴィヴィアン夫人はいないようだつたが、バーナードはまもなく彼女がヴィクトール・クーザンを手にして木の下に腰掛けているのを見つけた。バーナードが近づくと、彼を見つけていなかつたアンジェラは振り向いた。

「動かないでください」と彼は言つた。「あなたはまさに、僕がシエナであなたを描いた時の姿勢をしておられた」

「そのお話はよしてください」と彼女は答えた。

「あの魅力的な出来事を」とバーナードは言つた。「あなたがなぜ無視し続けようとなさるのか、僕には理解でききないのでですが」

彼女はしばらくもとの姿勢を取つて、むこうの丘を見ていた。

「これこそあの時のままのあなただ。横顔を向け、頭をすこし上向けて」

「忘まわしいできごとでしたわ！」とアンジェラは声を上げ、すばやく姿勢を変えた。

バーナードは返答をしようとしたが、ゴードン・ライトのことを思い出して何も言わなかつた。まもなく彼は、明日バーデンを発つつもりだと言つた。

「二人は彼女の母親の方へ歩いていた。彼女はすぐに彼の方を見た。「どこへ行かれますの？」  
「パリです」と彼は、まったくでたらめに言つた。どこへ行こうか少しも決めていなかつたからだ。

「パリへですか、八月に？」そして彼女は軽く笑つた。「なんてすばらしい思いつきでしよう！」

彼女は少し笑つたが、それ以上何も言わなかつた。そしてバーナードも自分の計画についてそれ以上の説明をしなかつた。二人はヴィヴィアン夫人のところへ行き、十分ほど座つていた。それからまた立ち上がり、庭の別のところへ歩いていった。あたりすべてが二人だけのものであつたが、そこはバーナードが好きなもので満たされていた。地面の高さが変化に富み、苦むした階段がそれそれをつないでいた。古い煉瓦の壁には薔薇の木が整枝されており、イタリアのパーゴラのように四目垣が水平に並べられている。ここかしこに高いポプラの木があたかももつと原始的な文化の段階から生き延びているともいいたげに立ち、硬い枝はじつと動かず、葉は絶えず震えていた。二人は庭のほとんど全体をまわつた。そしてアンジエラは、今朝ライト氏から手紙を受け取りましたが、彼はもう一週間戻つてこないそうです、と大変静かに言つた。

「あなたは留まつた方がよろしいですわ」と彼女はまもなくつけ加えたが、まるでゴードンが不在を続けることが追加の理由であるかのような口ぶりだった。

「僕には分かりません」とバーナードは言つた。「人が何をした方がいいかは、時々言いにくい場合があります」私はためらいつつ以下の展開を彼に用意する。それは、美しい娘がその障害を取り除こうと試みるのを見る喜びを彼が味わうように、障害を作り出したくなるという、あらゆる非難の中でももつとも不名誉なもの、すなわ

ち感情的に愚かだと非難される展開である。しかし、もし彼が、自分はバーデンを去った方がいいと今、本当に思つてゐるのしたら、私が先ほど引いた彼の言葉は、この確信のしるしというよりは、相手が反対してくれるだろうという期待のしるしであった、ということは認めなければならない。この期待は裏切られなかつた。もつとも、期待が満たされるやいなや、バーナードはそれを恥ずかしく思い始めたことも、私はつけ加えなければならない。「今の場合にはたしかに、そのような場合の一つではありますん」とアンジエラは言つた。「今の場合は本当にとても単純です」

「どうしてそんなに単純なのですか？」

彼女は一瞬ためらつた。「私があなたに留まつてほしいとお願いしているからです」

「あなたが僕にお願いされている？」と彼は静かに繰り返した。

「まあ」と彼女は声を上げた。「こういうことは、一度は言わないものです！」

彼女はむこうを向いた。そして一人は母親のところへ戻つたが、母親は、半ば催促の半ば抗議の不思議な視線をバーナードに送つた。公園を離れるときには、彼はヴィヴィアン夫人の横を歩き、アンジエラは距離をおいて彼らの前を歩いた。年配の婦人はただちに、ゴードン・ライトについて彼に話し始めた。

「あの方はもう一週間帰つてこられません」と彼女は言つた。「こんなに長く離れておられるのは残念です」

「そうですね」とバーナードは答えた。「ずいぶん長く感じられます」

実際、彼には非常に長く感じられた。

「あの方はいつもお仕事をなさつておいでですね」とヴィヴィアン夫人は言つた。

「彼が留守にしているのは楽しみのためではないと、奥様は確信しておられるようですね」

「あの方は古い友人に誠意を尽くされる人だと分かっておりま」す」とヴィヴィアン夫人は言つた。「きっと私たちのことをお忘れではないでしょ」う

「それはきっと當てにできますね」とバーナードは言つた。「僕たちのようになんかに彼のことを思い出してい る場合は！」

ヴィヴィアン夫人は感謝に満ちて彼を見た。

「もちろん、私たちはあの方を思い出します。毎日、毎時間思い出します。少なくとも、私の娘と私については そうですね。あの方は私たちにとても親切でした」バーナードは何も言わなかつた。そして彼女は続けた。「そ してロングヴィルさん、あなたも私たちにとても親切にしてくださいました。あなたにぜひとも感謝申し上げた いですわ」

「いやいや、とんでもありません！」とバーナードは眉をひそめて言つた。「あなた方にはむしろ感謝してほし くないと思います」

「もちろん」とヴィヴィアン夫人はつけ加えた。「すべてはあの方のためであることは分かっております。でも だからこそ一層、あなたに感謝申し上げたく思います。あの方が戻つてこられるまでの時間について、あらかじ め感謝を述べさせてください。これはあなたが同意された以上の責任ですわね」と彼女は、少し神経質に笑いな がら言つた。

「そうです。僕が同意した以上です。僕はここから去ろうと思つています」

ヴィヴィアン夫人はほとんど少し飛び上がつた。そしてバーデンの玉石の上に立ち止まり、彼を見上げた。

「ロングヴィルさん、お発ちにならなければならぬとしても、ご自分を犠牲になさらないでください！」

この言葉は、バーナードの耳に穏やかに嘲笑するような抑揚をともなって届いたが、その抑揚は耳に響かせるには十分だった。

「いや、結局のところ」と彼は、夫人と歩き続けながら言つた。「結局のところ、僕はライトとは違います。僕には用事がありません」

彼は夫人たちとともに、彼らの住居のドアのところまで歩いた。アンジェラは常に前を歩いていた。しかし彼女は、他の人たちが到着するまで、小さな菓子屋の窓のところに立っていた。彼女は母親を中に通した。それからバーナードを見ながら言つた。

「もう一度お会いできますわね？」

「できれば、いつか」

「つまり、あなたはお発ちになるのですか？」

バーナードはしばらく小さなピンクの砂糖の智天使<sup>⑯</sup>——それは天使の一人で、金色の弓を持っている——を見た。その人形は菓子職人が作る飾りの中にいた。それから彼は言った。

「今晚お伝えにまいります」

そしてその晩、彼は彼女に伝えに来た。城の庭園を歩いているあいだに、自分たちは出歩かない方がいいのです、と彼女は言っていた。ヴィヴィアン夫人のドアに近づいた時、彼は明るいドレスの人が小さなバルコニーに立っているのを見た。彼は立ち止まり、見上げた。その時、明るいドレスの人は両手を手摺にもたせかけ、肩を少し持ち上げ、姿勢を反らせて彼を見下ろした。非常に暗かった。しかし深い薄暮を通してさえ、アンジェラ・ヴィヴィアンの微笑みの素晴らしい輝きが見えた、と彼は思った。

「僕は行きません」と彼は少し声を高めて言つた。

彼女は返事をしなかった。彼女はただ、暖かい薄闇を通して彼を見下ろし、微笑んでいた。彼は家の中に入つた。そしてゴードンが戻つてくるまでバー・デン・バー・デンに留まつた。

## 第十四章

ゴードンは戻つてきてから二十四時間、彼に何の質問もしなかつた。それから突然始めた。

「やあ、僕に何か言うことはないかい？」

それは午後遅く、ゴードンが宿泊しているホテルでのことだつた。激しい雷雨が一時間前にこの地を襲つた。バーナードは両手をポケットに入れて、友人の部屋の窓のところにかなり漫然と立ち、どしゃ降りの雨が人気のない舗道にはねるのを見ていた。とうとう豪雨が和らぎ、雲が途切れはじめた。夜は晴れる予兆があつた。嵐が最高潮のあいだ、ゴードン・ライトは座つて手紙を書いていたが、その数は半ダースにも上つた。最後の手紙に封をし、住所を書き、切手を貼つた後で、彼は、今私が引用した疑問を友人に投げかけた。

「つまりヴィヴィアン嬢について、という意味だね」とバーナードは、窓から振り向くことなく尋ねた。  
「もちろんヴィヴィアン嬢についてだ」バーナードは何も言わなかつた。友人は続けた。「ヴィヴィアン嬢について僕に言うことは何もないのかい？」

バーナードはほどなく振り向き、ゴードンを見て少し微笑した。  
「彼女は楽しい人だ！」

「そんなことは役に立たない。君は以前にそれは試している」とゴードンは言った。「そうだよ」と彼は続けた。  
「そんなのは役に立たない」バーナードは窓の方を向いた。そして彼が黙っていたので、ゴードンは続けた。  
「君が何も言わるのは、否定的な判断をした証明だ、とみなす権利が僕にはありそうだ。君は彼女が好きでは  
ない！」

バーナードはふたたび素早く向き直った。そして一瞬、一人の男はお互いを見た。

「おいおいゴードン君」とロングヴィルはつぶやいた。

「じゃあ君は、彼女を好きなのか？」とゴードンは、近づきながら尋ねた。

「いや！」とロングヴィルは言った。

「それこそ僕が知りたかったことだ。言ってくれて大変感謝している」

「それを尋ねたことには、僕は感謝していないよ。君が聞かないでくれるだろうと、僕は期待していたんだ」

「じゃあ君は、彼女が大嫌いなんだね？」とゴードンは重々しく声を上げた。

「ただ、彼女が嫌いだ、だけで十分じゃないのか？」とバーナードは言った。

「それで十分役に立つ。でもその理由を僕に話してくれたら、もっと役に立つんだが。理由を一つ二つ言ってく  
れたまえ」

「そうだね」とバーナードは言った。「僕は彼女に言い寄ろうとしたが、横面を張られたんだ」

「ひどい奴だな！」とゴードンは叫んだ。

「つまり精神的に、という意味だけど」

ゴードンは目をみはった。少し戸惑っているようだった。

「君は彼女に精神的に言い寄ろうとしたのか？」

「彼女は精神的に僕の横面を張ったのさ」とバーナードは大声で笑つた。

「どうして彼女に言い寄ろうとしたんだ？」

この問いは眞実を求めようとする偏見のない習性をはつきりと表している口調でなされたので、バーナードの笑いはすぐには鎮められなかつた。とはいへ、彼は十分な眞面目さで答えた。「彼女の君に対する忠実さを試すためさ。他に何を期待できるんだい？ 彼女が潜在的な浮氣娘コケットじやないかと心配している、と君は僕に言つたよ。君は僕に機会を与えた。それで僕は確かめようとしたんだ」

「そして君は彼女が浮氣娘ではないと分かつた。それが君が言わんとしていることか？」

「彼女は岩のように硬い。ゴードン君、ヴィヴィアン嬢は君の地質学上の生成物中のもつとも硬い石と同じくらいい硬い」

ゴードンは奇妙にはつきりしたしつこさで首を振つた。「君はばかなことを言つてゐる。君は眞面目ではない。君は僕に眞実を語つていない。君が彼女に言い寄ろうとしたなんて、僕は信じないぞ。君がそんなゲームをしようとしたはずがない。立派なことではなかつただろうし」

バーナードは少し顔を赤らめた。彼は苛立つた。

「おい、その点を重視しすぎない方がいいぞ！ 絶好の機会だ、と君は前に言わなかつたか？」

「賢明にふるまう機会であつて、愚かになる機会ではなかつた！」

「ああ、機会には一種類しかない」とバーナードは叫んだ。「君は人間の知恵の範囲を強調している」

「彼女が言い寄ることを許したとしたら」とゴードンは言つた。「それは君の実験のすばらしい結果ということ

になつただろう」

「たぶん僕は、君には悪党に見えただろう。しかし君を潜在的な浮気娘から救つたことになつただろう。それにについては君にお礼を言つてもらうことになったかも知れない」

「しかし君は僕を救つてくれなかつたのだから」とゴードンは、事実を述べているというきつぱりとした様子で言った。

「僕が言つたことにもかかわらず、彼女が浮気娘だと君は思つてゐるね!」

「君が明らかに何か隠しているから、僕も何か思つてゐるさ。僕は真実すべてが知りたい」

バーナードは苛立ちが嵩じてきて、窓の方を向いた。

「彼が真実すべてを知りたいなら、教えてやろう」と彼は独りごとを言つた。

彼はちょっとのあいだ考えながら立ち、それからふたたび友人を見た。

「彼女は君と結婚するだらうと思うよ。しかし彼女が君のことを好きだとは、僕は思はない」

ゴードンは少し青くなつたが、手をたたいた。

「たいへん結構」と彼は叫んだ。「それこそ僕が君に望んでいる話し方だ」

「彼女の母親は君の財産をとても氣に入つていて、それが娘の方にも移つた。娘は、年三万ドルあることは樂しいことで、君を好きでないことは些細なことだ、と思うようになつたんだ」

「なるほど、なるほど」とゴードンは言い、彼の率直で明快な言い方に感嘆した様子で彼を見た。  
率直で明快になりはじめてみると、バーナードはそれに魅力を感じた。そして話すきっかけとなつたその衝動によつて、彼は激しいときえいえるほど言葉を続けた。

「母と娘は君を捕まえることで合意した。そしてアンジエラはきっと、結婚後もできるだけ君に優しくしようと誓いを立てたよ。ヴィヴィアン夫人はそのことの重要さを力説した。ヴィヴィアン夫人は大の道徳家さ」

「コードンは友人を凝視しつづけた。非常に興味をそそられていくようだつた。

「そうだ、僕もヴィヴィアン夫人のその点は気づいていた」と彼は言つた。

「ああ、彼女はとてもいい婦人さ！」

「じゃあ」とコードンは言つた。「君が彼女に言い寄ろうとしたというのは、本当じゃないんだね？」

バーナードはほんのちょっと躊躇した。

「そうさ、本当じゃない。僕は自分を悪者にしたのさ、彼女の名誉を守るために。僕が彼女を好きでない理由を言え、と君は強要した。僕はそれを理由に挙げたんだ」

「そして君の本当の理由は」

「僕の本当の理由は、僕が危害と見なさざるをえないことを彼女は君にするだろう、と僕が信じていることだ」「もちろんだ。」とコードンは、興味深げな目を下に向け、しばらく絨毯を見つめていた。「じゃあ、彼女が浮気娘だと君には分かった、というのも本当ではないんだね？」

「ああ、それは別の問題だ」

「やはり君はそれを発見したと？」

「君が真実すべてを知りたいなら言うが、僕は発見した！」

「どうやつて発見したんだ？」とコードンは、質問する権利に執着して尋ねた。

「バーナードはためらつた。「僕が彼女をたっぷり見たことを、君は思い出さなければならぬ」

「彼女が君を励ました、という意味か？」

「僕が非常に忠義立てをする友人でなかつたら、そう思つたかもしれない」  
ゴードンは喜び、感謝してバーナードの肩に手を置いた。

「そして、それなのに君は彼女を好きにならなかつたと？」

「おいおい、顔が赤くなるよ！」とバーナードは声を上げたが、実際少し赤面していた。「もう十分話したぞ。  
超鈍感な男の肖像を描くのは勘弁してくれよ。これが僕の見方だったわけだ。僕は君のことをずっと考えていた  
んだ」

ゴードンは友人の腕に手を置いたままだが、この宣言に応えてちょっと腕をたたいた。それから彼はむこ  
うを向いた。

「ありがとう。これこそ僕の考える友情だ。男らしく全部話してくれたな」

「男らしく、か。そうだな。覚えておいてくれたまえ。けつして神託のようではないからな」

「正直な男のほうが、どんな神託よりもいいと思う」とゴードンは言った。

「正直な男はいろいろな印象を受けるものさ！ 僕は自分の印象を君に話した。その印象は、もうこれ以上ない  
と言ひ張る。そんな印象で君の気を悪くさせたのでなければいいが

「全然」

「君を悲しませたり、落ち込ませたり、何か不安にさせたりしなかつたか？」

「僕をどんな奴だと思っているんだ？ 僕は君にお願いをした。役に立つてほしいと。僕は君にそれを押しつけ  
た。君はちゃんとやつてくれた。そして僕としてはただ感謝している」

「ありがとう、何もしていなが」とバーナードは微笑みながら言った。「君は実にたくさんの質問をしたね。今度は僕が、君に聞く権利がある質問を一つするよ。僕が君に話したことの結果として、君は何をするつもりなのかい？」

「何もするつもりはない」

この宣言によって会話は終わりとなり、二人の若い男たちは別れた。その晩バーナードはゴードンに会わなかつた。ゴードンが当然ヴィヴィアン夫人のところに行つたと思ったのだ。ロングヴィルの打ち明け話は、夫人の家に持っていくには思い荷があつたが、きっとゴードンはその荷をそこに降ろすだろう、とバーナードはあえて期待した。彼はゴードンに自分の印象を教えた。ゴードンは自分の気に入るよううにそれを扱うだろう。窓から放り投げようと、無関心にほうつておいてそれが古くなるにまかせようと。その晩の残りの時間を一人でぶらぶらしながら、バーナードはそう考えた。クワハウスのテラスでヴィヴィアン夫人の小さな一団を探しても無駄だった。午後の嵐によつてその場所は非常に湿気てしまい、常連客たちもほとんどいなかつた。バーナードはその晩を賭博室の、テーブルにひしめいている人の群れのただ中で過ごした。そして気晴らしに——これまでほとんど賭け事などしたことはなかつたが——ルーレットに二枚ほど賭けた。彼はこれまで二、三回賭けてみたが、少しも勝つことがなかつた。しかし今回は、手に少しばかり一杯の黄金を手繰り寄せるという心地よい感覚を彼は持つた。彼は賭け続け、勝ち続けた。彼は幸運に驚き、興奮した。これが極端だったので、六回ほど幸運が続いた後、彼はその場を離れ、外の暗闇の中を半時間ほど歩き回つた。楽しく気分も浮き立つたが、この感情はほとんど興奮にまで高まつた。しかしそれはテーブルに戻り、また勝ちが自分を待つていたのを知つた。何度も彼は幸運の番号に金を賭けた。そしてこれほど着実な幸運の連続はどうとう注目を集めはじめた。その噂は部屋々々に広がり、

ルーレットの周りの群衆は見物人の大集団に囲まれた。彼らは潮の変わり目を多かれ少なかれ期待している、とバーナードは感じた。しかし彼は彼らをがっかりさせてやりたい気分だった。幸運がまだ続いている間に、彼はポケットに一万フランを入れてその場を離れた。彼がホテルに戻った時にはとても遅かった。非常に遅かったので、彼はゴードンのドアをノックするのを差し控えた。しかし自分の部屋へ戻っても、彼はすぐに寝ることはとてもできなかつたし、寝ようとも思わなかつた。彼は夜半まで、彼の言葉でいえば、うろつきまわつた。しかしそれは一万フラン勝つて嬉しかつたからではなくて、自分がその晩を過ごしたやり方に突然嫌悪感を抱いたからだつた。喜びが突然つまらないものに思えてしまうのは、いかにもバーナード・ロングヴィルらしかつた。彼が感じたのは失望や後悔ではなかつた。賭け事という不埒な行為をひいきにしたことにやましさを感じたのではなかつた。自分が制御不能に陥つたこと、その時に測りえなかつた力に従つたことが苛立たしかつた。彼は酔つていたのであり、酔いから醒めようとしていた。率直であり、人が応じることのできるような圧力を加えてくる心地よい状況が発生した際にはそれを楽しく味わう人だ、という外観をいつも示していくにもかかわらず、バーナードは、自分を投げ出すことを本当はあまり好まなかつた。また、そうした際にはたちに自分を取り戻すのが常だつた。彼自身ではないことに、彼は身を投げ出してしまつた。そしてそれによって一万フランを儲けたという事実は、自分を統御できなかつたという疼くような感覚を和らげるには十分ではなかつた。彼は遊んでいたのではなかつた。遊ばれていたのだ。彼は盲目の獣的な機会の慰みものだったのであり、これほど粗雑に作用する神に好まれたことに屈辱を感じた。幸運だったのか不運だったのか？ 幸運がむしろいっそう俗悪に思えたということを別にすれば、バーナードはそんな区別など軽蔑した。夜が更けるにつれて彼の嫌悪感は増し、とうとうそれにもなう疲労によつて彼は寝入つた。彼は大変遅くまで眠り、目覚めた時には不快な意識を感じていた。考

えをまとめる前、自分の心に浮かんだことを、彼ははじめ想像もできなかつた。自分はアンジエラ・ヴィヴィアンの悪口を言つたのだろうか？ ルーレットで儲けたことにひどく不機嫌になつて寝入つたことを思い出し、彼は非常に安堵した。着替えをして部屋を出ようとした時、ゴードンの筆跡で上書きした手紙を召使いが持つてきた。その手紙の中身は以下のようであつた。

午前七時

親愛なるバーナード君

事情によつてただちにバークデンを発たねばならなくなつた。今から一時間後に出る列車に乗る。昨夜はとても遅く帰つてきたそうだね。だから僕は、この不自然な時刻に悲しい別れをするために君を起こそうとは思はない。昨夜この決心に至り、荷物をまとめた。だから出発する以外することがない。バーゼル瑞へ行くつもりだが、その後はどこへ行くか分からぬ。これほど楽しみも安定さもない状態だから、どうか僕の後を追わないでくれ。たぶんアメリカへ行くだろう。でも、いずれにしても、君とは遅かれ早かれ会うだろ。バーナード君、その間は、君の素晴らしい才能が君を相応に遇するように、楽しく過ごしてくれたまえ。いつも君の友人 G・W

追伸 僕が発つのは昨晚起こつたことの結果であるが、——辿りうるいかなる過程によつても——僕たちが交わした会話の結果ではない、ということもたぶん言つておいたほうがいいだろ。僕が極めて健康で機嫌がいいとすることも、つけ加えたほうがいいだろ。

友人が本当に八時の列車で出発したことを、バーナードはすぐに知った。朝もかなり時が経っていた。朝食を取りながら、彼は驚きつつ熟考に耽った。昨晚何が起こったのか？ ゴードンの部屋で話した後で何が起こったのか？ 彼はヴィヴィアン夫人のところへ行つた。そこで何が起こったのだ？ 彼がそこへ行つたのが、親友とよく話し合つた結果、娘さんを諦めました、とただ夫人に伝えるためだつたとか、娘本人にあなたに求婚する気がなくなりました、と伝えるためだつたとは、バーナードには信じられなかつた。ゴードンは何か決定的な出来事について言及している。しかし彼がバーナードの言葉によつて、バーナードの遠慮がちで無責任な印象によつて、決定をさせられてしまうとは、考えられなかつた。バーナードは、この考え方を自分に対する無礼だとして憤つた。しかし他に何が起こりえたかを想像することは難しかつた。とはいゝ、ゴードンが突然発つことになつた事情と、彼が友人から引き出すことができた情報との間には、「辿りうる」いかなるつながりもない、とゴードンは誓つてゐる。「辿りうる」つながりとはどういう意味だらう？ ゴードンは言葉を無為に使つことはないし、彼はこの点をはつきり区別するつもりなのだ。バーナードが先ほどの友人の手紙に意味を当てはめるのに役に立つたのは、ゴードンが普段正確に表現している、といふこの感覚だつた。自分は求婚を諦めようと決心してバーナードに戻つてきたこと、バーナードに尋ねたのは単に道徳的な興味からにすぎず、知的満足を得るためにだつたこと、をゴードンは仄めかすつもりだつたのだ。バーナードが彼に残念な話をしたという事実によつては、何も変わらなかつた。彼の行動を変えはしなかつた。そんな影響なら辿りえただらう。それは単に彼の想像力に影響を与えたのであり、想像力は測ることのできない類の結果だつた。事態をこのように見る見方は、ゴードンが機嫌がいいと述べてゐることで支持された。人は確信と調和して行動した時、常に機嫌が良い。もちろん、ヴィヴィアン嬢に喜ばれようとする試みを断念した後では、ゴードンが取りうる唯一の途はバーデンを離れることがだつた。はつ

きりした決裂はなかつたこと、ゴーデンの最後の訪問はただ別れの訪問であつたこと、その訪問の性質は彼の撤退を十分に示していたこと、娘を諦めた後では当然のことながらふたたび彼女に会うことを望まなかつたがゆえに、彼が立ち去つたこと、を、默想を続けていたバーナードはとうとう納得した。バーナードの側では、これが事態についての十分に一貫した見方だった。しかし一時間後、リヒテンタール通りを歩きながら、彼は突然立ち止まり、声を潜めて叫んだ。「僕は彼女にひどいことをしたのだろうか？ 彼女の未来に影響を与えてしまったのだろうか？」その日の後には、自分はただゴーデンに不釣合いな縁組はするなど警告しただけだ、と彼は半ダースもの回数独りいとを言つた。

\* ここに訳出されたのはヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) の第四作目の長篇小説『信頼』 (*Confidence* 一八七九年) 第九章から第十四章までである。第一章から第二章までは、『英文学評論』第七十九集 (一九〇〇七年一月、京都大学大学院人間・環境学研究科英語部会) に訳出された。そして、第四章から第八章までは、『文学と評論』第三集第六号 (一九〇八年十二月、文学と評論社) に訳出された。底本として、The Library of America 版を使用した。この版は、一八八〇年二月出版のアメリカ初版を再録している。

## 註

- ① 東風——east-wind. 日本でいう北風にある。
- ② ヴィクトール・クーザン——Victor Cousin (1792-1867). フランスの哲学者。ヘーゲル、シェリング、スコット・ハーダの常識哲学などの影響を受け、折衷主義を唱えた。哲学史の領域を開拓。著作に『近世哲学史講義』、『真善美について』

て』など。

③ クロイナス —— Croesus (d. 546 B. C.). Lydia 最後の王 (560?—546? B. C.) バビロニアやヒジアムの交易で莫大な富を築いたとされる。

④ リヒテンタール通り —— the Lichtenthal Alley [Lichtentaler Allee] 市街地の南に、オース川に沿って広がる公園。古くはバーデン市内と郊外のリヒテンタール修道院を結ぶ道だった。約三五〇年前に檻の木の並木道となり、十九世紀には三百種以上の花々が植えられ、貴族、各国の政治家、芸術家たちの庭園社交場となった。

⑤ フォークストン —— Folkestone. イングランド南東部ケント州のドーバー海峡に臨む海港・保養地。

⑥ オーフン・フィールズ —— 《ファットボール》 open field (=broken field) ティフェンスラインを越えてティフェンダーのが分散しているフィールド。攻撃側はヤードイッジ (yardage) をゲインするのが容易。

⑦ 進軍命令 —— marching orders ラブロック大尉は、軍人らしく軍隊用語を使っている。ただし欧米では、退役後も現役時の階級で呼びかけられるのが通例なので、彼が現在も軍人なのかは不明。

⑧ ラブロック大尉は、彼女たちがコードンの財産に魅力を感じていることを仄めかしている、と思われる。

⑨ クワハウスでは夜ないとカジノが開かれており、賭け事に熱中して財産を失う人がいることを指している。ドストエフスキイ（一八二一一八一）は、(一)のカジノにおける自らの経験をもとに『賭博者』（一八六六）を書いた。

⑩ 彼女たちが滞在しているバーデンは、「黒い森」(Schwarzwald) の北西に接している。この有名な森の総面積は約五一八〇平方キロ。多くの木が植林されたモミであり、密集して生えるモミの木によつて黒く見えることが名前の由来とされる。

⑪ 小包は留め置きにしましょ —— a parcel to be left till called for 「留置小包」

⑫ バーデン大公 —— the Grand Dukes of Baden 一八〇六年八月の神聖ローマ帝国終焉により、マルグレイヴ家がバーデン大公の称号を得た。この大公の地位は、ドイツの君主制が共和制に代わった一九一八年まで続いた。本書の舞台となっている十九世紀後半のバーデンの大公はフリードリッヒ一世 (Frederick Wilhelm Ludwig, 1826-1907) であり、彼は一八五六年から一九〇七年の長きにわたって第六代バーデン大公であった。

⑬ 智天使 —— cherub ケルビム。天使の九階級の第二位。知識を司るとされる。絵画や彫刻では、翼の生えた丸々とした

ヘンリー・ジェイムズ 『信頼』

た愛らしい子供として表される。

(14) バーゼル — Basel スイス北西部の都市。スイス最古の大学がある。